
Diamond dust 番外編1

龍火リュネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i a m o n d d u s t 番外編 1

【Nコード】

N 2 6 9 8 B

【作者名】

龍火リユネ

【あらすじ】

小説Diamonddustの番外編です、何故かミスコンに参加することになった主人公アルト・・・その結末は・・・？

(前書き)

D i a m o n d d u s t 番外編1は、小説、D i a m o n d
d u s tの第一章の番外編です、本編を読まないと分からない部分
がありますので注意してください

さて、特別休暇を貰ったのは良いのだがどう過ごすか
私は今まであまり仕事を休んだ事が無いので休日の過ごし方とかが
さっぱりだ

毎日本拠地に泊り込みだったので家に帰るのは久々だと思いドアを
開けた
すると

「やつほー、アルト」

・・・？

「ソプラノ・・・お前・・・どうやって入った・・・」

「ピッキング」

正義の騎士団相手に堂々とピッキングと言い張るのはすごい度胸だな
と・・・無駄な事を考えながら何も無い家の椅子に座る

「で・・・？何の用だ」

「暇だろうからね、アルトみたいなタイプの方は、正しい休日の過
ごし方を教えに来たのよ」

笑いながらそう答えるとソプラノは私の横に座った

「はぁ・・・べつに良いのに・・・」

今のくだらない用件に私は騎士団では使わない、敬語と私の素が混
じった口調に変わった

「今ね、外でミスコンやってんのよ、面白そうだし・・・出ない？」

「・・・私を見て言ってるのか・・・それは」

「182cmの女性もそう居ないから目立つわよ」

今までの過程で言っただけは良かったが私は女だ

無駄にでかく今でも本部で私を男と認識してる奴の方が多い

まあ、女として見られるよりも男として見られたほうが気が楽で良
いのだが

「大体・・・私がドレスとか着ても女装してるように見えるだけだろ」

「そんな事ないわよ、顔は整ってるからぎりぎり女だもの、まあ・・
間違えれば美男子でしょうね」

「とにかく、私は出ないぞ」

「残念ながらもうエントリーしてあるんだよね」

「．．．．．」

突然のソプラノの登場で大変な事になりそうなこの一週間

さて、この先何が有るのだろうか

悪い事ばかりだろうがたまに違った日をすごすのも良いだろう

「ほら、もうすぐ始まるからコレに着替えて」

そう言っ手渡されたのは黒と青でまとめられたドレスのような物
それに青いヒールと手袋だった

「．．．コレを着るのか．．．？」

「コレを着るのよ」

私は抵抗をしながらもちゃんとソレに着替えて外に出た

もちろんソプラノも出るらしく、彼女に似合った紫、ピンクなどの
色でまとめられたドレス姿で私の前を歩いた

町に出ると二人はすごく目立った

いかにも美人で美しいドレスを着ているソプラノに

身長が高く高貴なオーラが出ている私・ソプラノが言ったのだが

「おい．．ソプラノ、すごい見られてるぞ」

「そりゃ目立つわよ、それにアルト、けっこう顔知られてるでし
よ？」

「ああ、でも男と思ってた人もかなり居るからな．．」

周りから聞こえる声はソプラノの美人な顔たちについてと私の身長
に対してが殆どだ

聞いててムカつく言葉もたまに聞こえるがそこは抑えようと思う

会場に着くとソプラノと私は控え室へ行った
そこに居るのはやはり美人が多かった、まあ・・・例外も居たが
これなら私は勝てないだろう

そう思い控え室の椅子に座っているとミスコンが始まった

どどんといろんな人が歩いてポーズをするという演技をしていた
私には面倒くさいとしか考えられない

なんだかんだソプラノに文句を言いつつもソプラノの番が来る

「がんばってこいよ〜」

「もちろん」

ソプラノはステージに立ち演技をした

恐らくこの中で一番輝いていただろう演技だった

次は私の番だった

ソプラノの気が済むように適当にやろう
そう思いステージに出た瞬間の事だった

「俺たちは幻影盗賊団だ！此処にいるやつら！俺らに宝石を渡す
んだ！さもなくばお前らを殺す！」

会場からは叫び声や泣き声などが聞こえる

「・・・うわ・・・」

やはりソプラノの知り合いらしくソプラノは嫌そうな顔をした
今、こいつらを捕まえなければいけないのは騎士団の私

私が今やらねばならない事はこれだ

私はステージから飛び降り近くにあった長い木の棒を掴んだ

そして幻影盜賊団、恐らくボスが居なくなつたのだから下つ端だろう
幸い私の着ていたドレスは裾が短い物で素早く動けたのでそのまま
そいつらに切りかかった

「覚悟！」

死なない程度にそいつらを棒で強く叩く

するとそいつらは一発で倒れこんでその隙にそばにあつたロープで
縛り棒にくくつた

騒動がおさまつてソプラノはその幻影盜賊団のやつらに近づいた

「あんたらねえ．．．ここまで低俗になつたの？あたしが居なくなつ
てから」

「う．．．うわ！？ソ、ソプラノさんっ！？」

すごい恐れられようだ、流石はボス、といったところだろうか

「次．．．こんな低俗な事したら．．．死ぬよ」

「ひっ．．．」

恐怖の声をそいつが出した時、ソプラノの足がそいつの顔面にとぶ
思い切り蹴られたようだ、蹴られたやつは気絶していた

「ソプラノ、このぐらいで良いだろう」

「そうね、まだ気がすまないけど」

この後、私は何故か優勝した

悪者をこらしめた、と言う事で人気が出たらしい

まあ、色々あつたがなんとか楽しい一日だったと思う

+ おわり +

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2698b/>

Diamond dust 番外編1

2010年12月1日00時50分発行